

前号の『漢文教室』(第196号)で、「七言一句から始める漢詩の指導」と題して、漢詩学習の一環としての創作指導の手順、とりわけ、短歌や俳句に比べて漢詩は創作指導に取り組みにくい実情を踏まえ、七言一句から始める具体例を示しました。

要点だけをまとめれば、①七言の句は「二・二・三」のリズムで、②下三字は韻脚集を用いて韻目を共通にし、③できれば複数の七言句を作るところまでの話でした。

今回は、出来上がった七言句の平仄を整える段階に進みます。平仄のままの概要、平仄を整える実践例、その際の指導のポイントをまとめましょう。

1 平仄とは

中国語会話を勉強された方は、現在の北京語(普通話)に「四声」という分類があることをご存知だと思いますが、漢詩で扱う古典語にも「四声」がありました。漢字語尾の発音の変化(声調)によって分類することは同じですが、古典語では、高く伸ばす「平声」と、上がったたり下がったり詰まったりと何らかの変化をする「上声」「去声」「入声」の四種となります。このうち、「平声」のみを「平」、他の三声をまとめて「仄」と呼び、併せて「平仄」というわけです。

発音は時代とともに変化します。古典語が使われていた時代の人々が実際にどんな発音をしていたのかは分からないことですが、個々の漢字についての当時の発音分類は残っていますので、現代の私たちでも「平」と「仄」、あるいは「四声」を見分けることは漢和辞典を使えば簡単にできます。

電子辞書の漢和辞典でも「四声」が表示されているものもありますし、インターネットが使える環境ならば私の運営する漢詩サイトでも平仄検索ページが用意してあります。

平仄に慣れるためには、実際に授業で扱った詩を用いて、生徒自身に平仄

調べをさせるのが効果的です。

平仄記号は、○が平声、●が仄声を表するのが一般的です。

青山横北郭

○○○○●

白水遶東城

●●●○○

(李白『送友人』)

月落烏啼霜滿天

●●○○○○

江楓漁火對愁眠

○○○○●○○

(張繼『楓橋夜泊』)

その他に、生徒自身や芸能人の名前の平仄を調べたり、「漢数字の一から十で平声はいくつあるか」「虹の七色の平仄は？」など、興味が湧きそうな課題を用意できると作業も楽しくなります。

また、漢字を音読みした時に、語尾が「…フ」「…ツ」「…ク」「…チ」「…キ」となる字(「物」「国」「識」など、ただし、「フ」は「蝶」「急」のように歴史的仮名遣いでは「仄(入声)」になりますので、従来から「フツクチキは仄」として、平仄判断の時には便利な知識です。

生徒の生年月日や授業の日付、曜日、あるいは地名などの固有名詞を用いて漢字を並べておき、「入声」だけを見つけるようなクイズ的な課題も変化があつて面白いでしょう。

更に、漢和辞典を生徒が開いたついでに、日本で「漢音」と呼ぶ音読みは唐の都長安の人々の発音を日本人(遣唐使)が聞き取ってきたものであることや、日本でも中国でもずっと、その唐の時代の発音(平仄)に基づいて漢詩を作ってきたという長い伝統についても、少し触れられれば良いですね。

2 一句の平仄のきまり

例えば、七言の句を口に出して読む時に、七つ並んだ漢字が全て高く伸ばす「平声」だったとしたら、どんな感じがするでしょう。あるいは、逆に上がったたり下がったりの「仄声」ばかりだったらどうでしょう。頭の中で想像するだけでも、「平声」ばかりでは単調な感じがするし、「仄声」ばかりだと

慌ただしくて落ち着かないような気がしませんか。

詩を、音楽を奏するように耳に心地良く響かせるために、句末の押韻に加えて、「平声」と「仄声」の配列を工夫しようと考えたのが、隋から唐時代の人々でした。

一つの句の中での配列、詩全体の中での配列、そこから生み出されたのが近体詩における「平仄の規則」です。

漢詩としてこれだけは大切という規則に絞ってお話しします。

最初は、一句の中での「平仄の規則」ですが、絶対に守るべき規則は次の二つです。

- ①…二字目と四字目は「平仄」を逆にする。(「二四不同」)
- ②…二字目と六字目は同じ「平仄」とする。(「二六対」)

①と②は、句のリズム(七言句の「二・一・一・三」など)に関わるものです。中国語は二字をひとまとまりにする傾向が強く、漢詩でも二字ずつに少し切れ目を入れて読むので、その切れ目の「平仄」を互い違いにしようというものです。

この他に、③「下三連の禁(下三字全てを同じ平仄にしない)」④「孤平の禁(五言句の二字目・七言句の四字目が平声の場合、仄声で挟んで孤立させない)」が一句の平仄の規則としてありますが、この2点は授業の場面では初めから生徒に示す必要はなく、指導する側が理解しておけば良いことです。該当する作品が出てきた時、その段階で指導する形が良いと思います。

平仄の規則を実際の詩句で生徒に確認させる作業は省けません。前に平仄調べで用いた詩を再度使うのも時間節約の点では良いでしょう。しかし、時間にも余裕があり、生徒が辞典を引くことにあまり抵抗が無いようでしたら、より多くの作品に触れる意味で、異なる詩から例句を示すことも有効です。

ただし、今回は平仄の規則に合致した句をあらかじめ選んでおきましょう。特に、五言絶句や李白の詩には、古体詩に近く、近体詩の平仄の規則には合わない作品もままあります。あまり最初から規則の例外が多いのは、聞く方も説明する方もテンションが下がりますので、事前チェックをお忘れ無く。

平仄への興味づけでは、「推敲」の故事を私はよく用います。

苦吟派の賈島面目羅如の故事ですが、彼が悩んでいたのは「僧□月下門」という句の二字目、「□」の部分です。月明かりの友人宅の門を僧(私)が「推」すのか、「敲」くのか。それぞれの字は、動作の違いを表すだけでなく、友人宅の門の大きさや形状、訪問の約束の有無、静寂感の深まり具合まで表しているとされ、議論の種が多い、楽しい話です。でも、どうして普段使う「押」や「叩」じゃないのか、疑問に思ったことはありませんか。

平仄の説明の後にこの故事を出し、先ほどの「押」「叩」の疑問を投げかけると、多くの生徒はピンと来るはずですので、応用例としてお勧めします。

3 平仄を合わせる

さて、自分で作った句の場合には、その平仄を調べなくてはいけません。上記の規則に適合していれば平仄の整った「律句」として、絶句に使える句ができたこととなります。もし適合していなかったら、修正が必要です。

修正の方法は色々あり、語順や漢字を入れ替えるだけで済むこともあれば、同意の語に置き換える、場合によっては素材そのものを交換(例えば、花を鳥にしたり、山を雲にしたり、数を増減したり)することもあります。私の勤務校での漢詩講座受講生の作品を使って、具体例を少し示しましょう。

紅葉遠山夕陽明

紅葉の遠山 夕陽明らかなり

この句は「遠くの山の紅葉がきれいで、沈みかけた夕陽がきれいだ」という景を詠んだもの、平仄は「紅。葉。遠。山。夕。陽。明。」となっていて、「二四不同」は良いですが、「二六対」が崩れています。

修正として「夕陽」を「夕日」に替える方法もありますが、ここではあつさり「遠山」と「紅葉」を入れ替えれば、修正後は「遠山紅葉夕陽明」となり、平仄は整います。

生徒は景を描くのに漢字を苦労して選び出して来ています。また、使った語句への思い入れもあるかもしれません。できるだけ、最初の語句を生かす形で修正の方向を示した方が良いでしょう。

春風庭前百花鮮 春風 庭前 百花鮮たり

平仄は「春風庭前百花鮮」ですので、「二四不同」にするために「庭前」を「庭裏」と替えます。「裏」は「反対側」ではなく「内側・中」の意味、「脳裏」「胸裏」と同じ用法です。

山色黄落白露横 山色 黄落 白露横たふ

この句は「山の様子は葉が黄色く落ち 美しい露が広がっている」という意味です。平仄は「山色黄落白露横」ですので単なる入れ替えでは済みません。生徒の思い入れということで言えば、「黄落」「白露」は色の対比が工夫されていますので残したい言葉でしょう。

となると、「二六対」を生かして「黄落山色白露横」とまぎれ替えて、中の二字について、「二四不同」と「四字目の孤平の禁」に合わせて、どちらも平声になる方向で考えます。「山容」「山光」のような同義語を入れるのも案ですが、情景を深めるために、私は「黄落山寒（山寒くして）白露横」と例示しました。

4 平仄合わせは共同作業で

平仄のために詩句を修正するという指導には、漢詩の語彙力と共に、詩的創造力や感性が求められます。教員は読書経験は豊富でも、漢詩創作の経験はほとんど無いのが実際かと思えます。指導という立場ではなく、できれば生徒と一緒に、平仄を整えるために辞書を何度も引き、工夫したり悩んだりしながら、生徒の感覚を共有してほしいと思えます。

私の主宰する漢詩サイト『桐山堂』(<http://osando.pu.jp>)では、一般の方からの漢詩の投稿を受けつけ、掲載時には特別な場合を除いて全ての詩に私の短い感想を添えています。これまでに三千首余り、初心者からベテランまで幅の広い方々の作品ですが、一貫して心がけているのは、作者が描こうとしている世界、作者の感動がどこにあるかを見ることです。

その上で、作者の思いが言葉として十分に表現されているかどうか、もっと良い言葉、もっと効果的な句の構成はないか、自分が詩作をするつもりで、

いつも辞書や漢詩集と格闘しています。

七言句の創作から一人でも二人でも漢詩に取り組もうとする生徒が出てきたら、是非先生方も、詩に籠めようとしている生徒の心を汲み取り、より良い完成を目指していただきたいと思えます。

漢詩は、形式も厳格に整い、用語も中国古典語を用いるもので、現代の私たちから見れば、言わば「古い器」です。その「古い器」に高校生の「新しい心」を盛ることの面白さ、楽しさは、一緒に学び、歩むことから生まれて来るのだと確信しています。

(以下次号)